

シンポジウム
研究班発表

台頭中国と東アジア秩序への多角的アプローチ

—外交戦略・地域主義理論・思想—

徐 涛

皆さん、こんにちは。愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）研究員の徐涛と申します。私の報告のテーマは「台頭中国と東アジア秩序への多角的アプローチ——外交戦略・地域主義理論・思想」です。この報告では、台頭する中国による東アジア秩序への影響を理解するには、外交戦略、地域主義理論、そして思想からなる多角的アプローチが有効であることを示したいと思います。

これまで日本における中国の東アジア外交研究、地域主義外交研究では外交戦略の視点が中心となっていますが、実際中国が東アジア地域秩序に与える影響は、政治、経済、安全保障、さらに思想、規範など多岐にわたります。そのため、外交戦略のアプローチだけではそれを捉えるには不十分です。中国は積極的に地域主義外交を展開していますが、しかし中国はどのような地域主義像を持っているのか、それがよくわからないということです。

それから近年、中国を中心とする「朝貢システム」が、この21世紀において新たに築かれつつあるという議論もあります。では、実際現在の中国では華夷秩序あるいは朝貢貿易がどのように理解されているのか、この問題について十分な分析がなされていないように思います。

こうした中国の東アジア共同体論、あるいは、東アジア論の持つ多面性を捉えるためには、多角的アプローチが必要だと考えています。表1が示しているように、1990年代から、特に2000年代に入ってから、中国は積極的に地域外交、地域主義外交を展開しています。2013年以降になると、さらに経済や安全保障の面において、中国の主導の地域秩序を構築しようとしているわけです。ニュースでもよく見られる「一帯一路」プロジェクトはその一つですが、ここでは深く立ち入りません。

時 期	中国のアジア外交／東アジア地域主義外交
1980年代	善隣外交、独立自主の対外政策
1990年代	「周辺外交」、APECへの参加、EAEC構想への支持、ASEANへの接近、上海ファイブの発足、ASEAN+3やASEAN+1、日中韓の発足
2000年代 ～2012年	中国ASEAN FTA提案、ボアオ・アジア・フォーラムの創設、上海協力機構の発足、東アジア・サミット

2013 年～ 2017 年	「新アジア主義外交」、「一帯一路」政策、AIIB の創設、アジア信頼醸成措置 会議（CICA）の主導
-------------------	---

表 1. 中国のアジア外交／東アジア地域主義外交 出所：徐涛『台頭する中国における東アジア共同体論——戦略・理論・思想』花書院、2018 年、39 頁。

私の議論は図 1 の示すイメージになります。まず、外交戦略のアプローチは、中国の戦略的東アジア共同体論に焦点を当てます。戦略的東アジア共同体論というのは、国家の目標を達成するための手段として東アジア共同体を選択し、その構築を推進していく議論です。これは中国政府、そして政府系シンクタンクが展開している議論です。

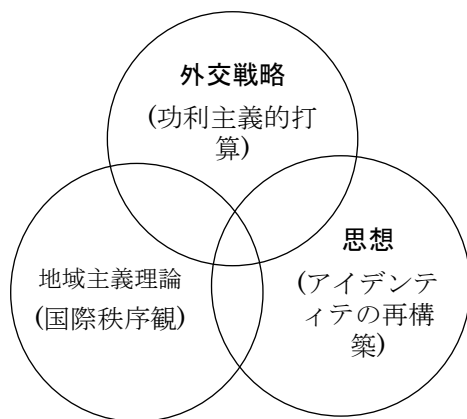


図 1. 台頭する中国と東アジア秩序を捉える多角的アプローチのイメージ

出所：筆者作成。

次は地域主義理論の視点で、中国における地域主義理論の在り方を把握するというものです。このアプローチによって、中国の地域主義認識、国際政治観を把握できると考えています。というのは、中国において地域主義を含む国際関係理論がどのように受容され、そして発展してきたのかを把握することは、中国の地域主義認識、それから中国の国際政治観を理解するための重要な手がかりとなるからです。

さらにもう一つの丸は思想の視点です。思

想のアプローチは、中国において東アジア共同体、あるいは東アジアがどのような思想的課題とされているのか、それを分析することです。中国の歴史研究者、思想史研究者、あるいは哲学者は 90 年代後半から積極的に東アジアに関する議論を展開しています。こういった議論は日本では、特に東アジア共同体論を語るメインの領域である中国外交研究ではほとんど注目されてきませんでした。

指摘しておきたいのは、この三つのアプローチが互いに関係し合うものだということです。外交戦略、理論、思想という三つのアプローチから、中国の東アジア共同体の分析することによって、(1) 手段、あるいはツールとしての「東アジア」、(2) 新地域主義に基づく、秩序としての「東アジア」、(3) ポスト西洋中心的な国際秩序を考える際の価値・規範、あるいは中国自身を認識する際の媒介としての「東アジア」、という三つの東アジア像を提示することができると私は考えています。実はこのような議論を展開した拙著（『台頭する中国における東アジア共同体論——戦略・理論・思想』花書院、2018）は 2 週間後に公刊される予定です。本日は詳しいお話はできませんが、拙著のエッセンスを紹介したいと思います。

まず外交戦略のアプローチですが、すでに述べたように、中国は 1990 年以降、さまざまな東アジア戦略、東アジア地域主義外交を展開してきました。当然、その戦略的目的は、中国の台頭にあり、地域的大国の地位を確保することにあり、さらに地域大国として世界的な大国に発展していくことにあります。

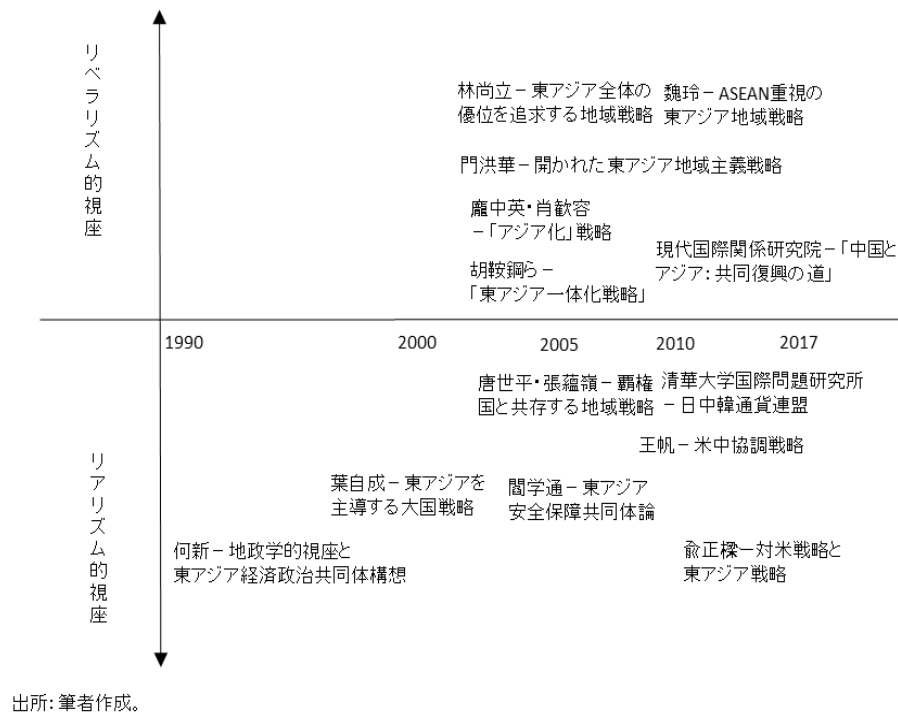


図2. 外交戦略のアプローチ 出所: 徐、前掲書、98 頁

中国の東アジア戦略論は大きく三つの段階に分けることが可能だと思います。外交戦略のアプローチを示す図2をご覧ください。第一段階は90年頃、中国はまだ経済規模が小さく、弱かった時期です。次の段階は、大国戦略論を展開する初期段階にあたる90年代後半から2008年までです。さらに第三段階は、2008年のリーマン・ショック以降です。ご存じのように、リーマン・ショックのあと、中国の大国意識が急速に高まってくるわけですが、そこで中国が積極的にグローバル秩序の改革を目指し、新しい東アジア戦略論を展開していく。

次に、東アジア戦略論の認識枠組みを座標軸で説明したいと思います。図2の縦軸は戦略論の認識枠組みを示しています。基本的にリアリズムとリベラリズムに分けられています。図2が示しているように、パワー、特に軍事力を強調するような東アジア戦略構想は決して多くはありません。一方、横軸の2005

年あたりを見ていただくとわかりますが、地域制度、地域レジームを利用して中国の発言権を高め、ルール作りにおける中国の影響力を拡大していく、それによって自分に有利な秩序を築いていくというような議論が多くみられます。

一方、2009年以降、リアリズム的な観点が増えています。その背景には2009年あたりから、東シナ海問題や南シナ海の問題で中国を取り巻く地域環境が非常に悪化していたことがあります。中国の学者やシンクタンクはリアリズムの観点から地域主義戦略論を展開しているが、2010年の「米中協調戦略」論にしても、2011年の「アジア運命共同体」構想（現代国際関係研究院）にしても、決して地域主義を放棄したわけではありません。彼らは大国間の協調（大国コンサート）を重視しつつも、地域協力制度をも重視するのです。次は地域主義理論のアプローチです。東アジア戦略論は単なる自国の国益を実現するとい

う政略的計算によって支えられているのではありません。国際政治観の知的基盤ともいえる地域主義理論の受容も重要な要素と考えられます。90年代以降、地域主義プロジェクトが世界的な興隆を見せている中で、中国の学者は欧米の地域主義理論を学習し、地域主義

についてより深く考えていくようになります。つまり、グローバル化時代において地域主義は国際政治の一つの新しい基盤であると認識されるようになり、それがやがて中国の国際政治観の一部となっていくわけです。

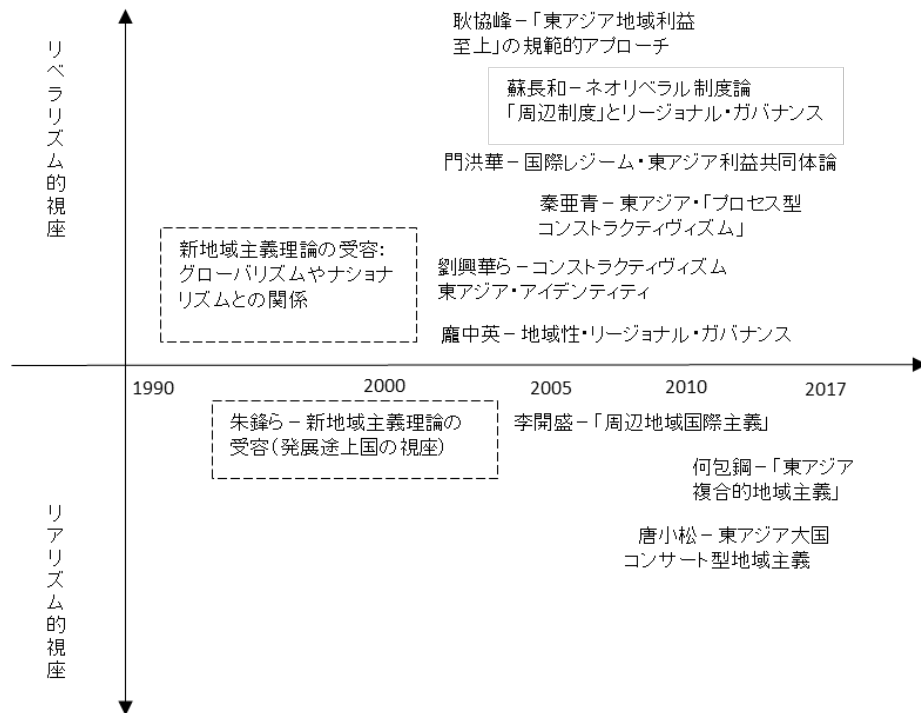


図3. 地域主義理論のアプローチ 出所：徐、前掲書、134 頁。

実際、図3にあるように、中国の学者の間で地域主義理論をめぐって様々な議論が展開されています。注目していただきたいのは、2005年あたり、上のほうにある国際レジーム論、そして東アジア利益共同体論です。これらも中国政府に近いシンクタンク、あるいは学者が提案しているものです。今、中国政府が推進している「一帯一路」構想は、まさに「利益共同体」をもって自らの影響力を拡大していくものと言えます。さらに、中国はこの「利益共同体」をもってアメリカの自国優先主義に対抗していくというソフトな戦略を取っているように思います。ここで指摘し

ておきたいのは、こういった戦略の背後には地域主義理論によるサポートがあるということです。また、中国の「東アジア化」、すなわち東アジア・アイデンティティを求める議論もあるわけです。

最後に、図4を見ながら、思想のアプローチを説明したいと思います。皆さんがご存じのように、90年代以降、とりわけ2000年以降、西洋発の近代化の負の側面がいっそう顕著になり、世界は近代化のもたらした地球的問題群に直面しています。急速な市場化を進める中国でも、さまざまな新しい社会問題が出現しています。そこで知識人たちが、近代

とは何かと問い質し、西洋的近代性（モダニティ）に対する批判・反省を強めていきました。さらに、こうしたモダニティに対する批判・反省が思想的東アジア論へとつながって

いきます。批判的知識人が中国における欧米中心的な考え方、中国中心の考え方を相対化していくなかで「東アジア」に注目したのです。

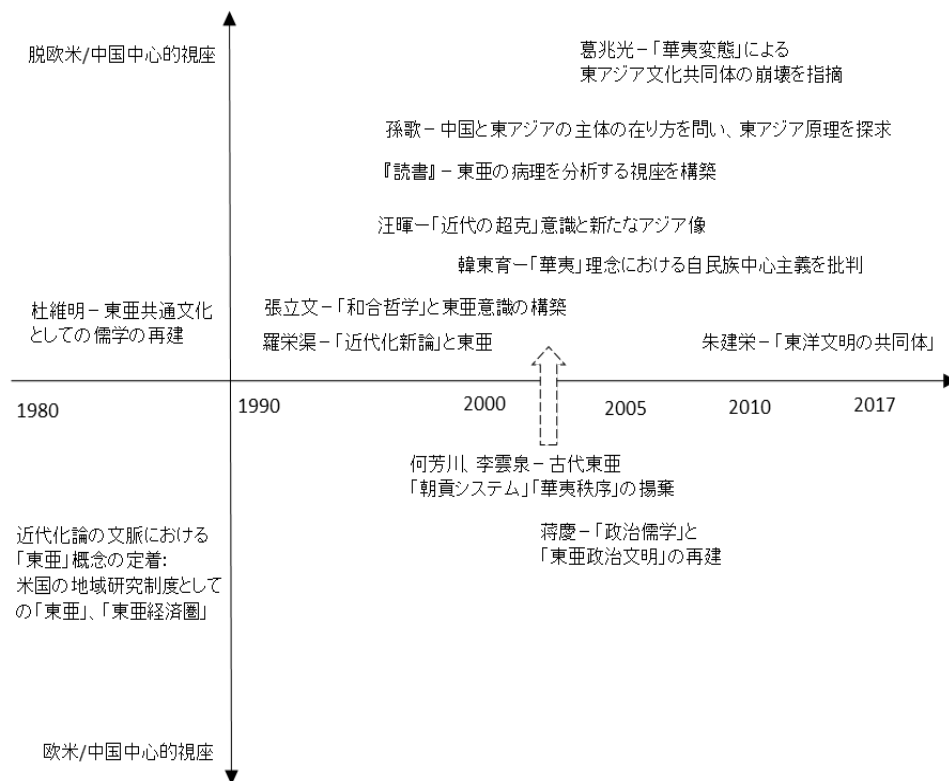


図4. 思想のアプローチによる東アジア論 出所：徐、前掲書、182 頁。

たとえば、知識人の間で広く読まれている『読書』という思想評論誌がありますが、汪暉さん（当時、社会科学院）が編集長を務めていた時期（1996～2007）、批判的知識人はこの雑誌を陣地にして、脱欧米中心の世界像を模索しています。そのなかで孫歌さん（当時、社会科学院）を含む批判的知識人は重要な思想的資源として日本に注目していく。たとえば、竹内好の思想はその一つです。それから、日本や韓国の東アジア論の越境も中国の知識人が「東アジア」を語るようになった要因の一つです。

2000 年頃、哲学者を中心に「東アジア的価

値」、あるいは「アジア的価値」の再構築めぐる議論が台頭していきます。たとえば、東アジアの儒学、儒教の思想の再構築（蔣慶）や東アジア地域共通の「和合哲学」の提唱（張立文）はそれです。さらに、20 世紀前半の日本の思想界に登場した「近代の超克」の思想（ここでは竹内好のいう「思想としての『近代の超克』」を意味する）に共通点のある議論が 21 世紀初頭の中国で展開されているのです。

このように、中国自身、さらに東アジア地域の思想、あるいは規範をめぐる模索がされており、「東アジア」あるいは「アジア」は

新たな思想的資源となっているのです。これは、近代以降の中国人の自己認識あるいは世界認識の基本であり続けた「中国—西洋」あるいは「伝統一近代」という枠組みが大きく揺らぎ始め、中国に東アジア・アイデンティティが生まれつつあることを意味すると言えます。そして、現代中国思想における「東アジア」は、中国のアイデンティティの再構築に深くかかわる価値の媒介であり、あるいは自己認識の変革を要求する媒介でもあります。このように、中国における東アジア論を戦略、理論、思想という三つのアプローチからそれぞれ検討してきました。実際、この三つのアプローチ（次元）が重なり合う部分もあります。図5のように、三つのアプローチによって三つの東アジア像を浮かび上がらせることができます。

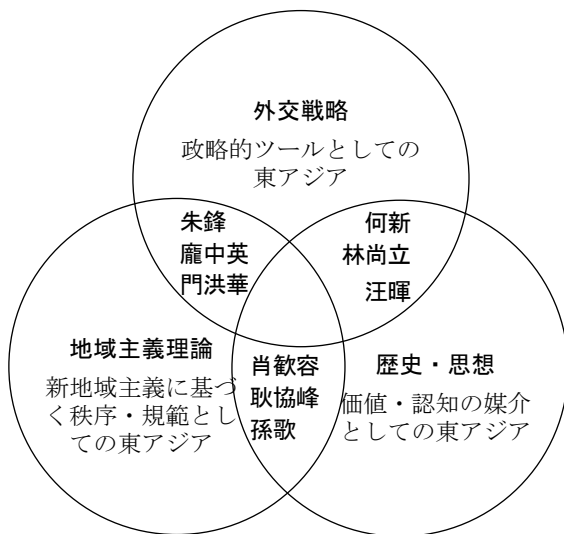


図5. 多角的アプローチによる立体像
出所：筆者作成。

この三者の相関関係については、時間がないため、ここで詳しく述べることはできません。三つのアプローチの交差する部分に学者の名前を入れてありますが、それらの学者の議論は戦略と思想の相互作用（強化と制約の

両方を含む）や、理論と戦略の支え合う側面、さらに中国の新しい主体の在り方を求める側面を表しています。

この三つのアプローチから、今後、東アジアの新しい秩序の形成を考える際に、やはりパワー、制度、規範、そしてアイデンティティの考察が重要になってきます。最後に、何人かの代表的な学者の議論を紹介したいと思います。

まず、シンガポール国立大学の鄭永年の議論です。鄭永年さんは台頭する中国が「アジア的価値」と「アジア運命共同体」を統合させるべきだと主張しています。彼によれば、台頭する中国が一国で西洋に立ち向かう、あるいは一国で世界に立ち向かうような構図は、中国にとって非常に不利です。中国がこれまでの自己認識を反省し、アジアとの融合をはかり、「アジア的価値」をもって、つまりアジアという一つの地域として西洋に向き合う、あるいは世界に向き合うべきなのです。これは戦略と思想の連結と言ってよいでしょう。次に、国際レジームと地域利益共同体論を提唱している門洪華（中央党校、当時）らの議論を取り上げたいと思います。門らが提案しているのは「開かれた東アジア地域主義」理論、あるいは戦略です。なぜこのような理論・戦略が有効なのか。門らによれば、21世紀の地域主義は、従来のブロック経済と違うものであり、中国は開かれた地域主義という規範を遵守することで、アメリカなどによる中国封じ込め戦略をかわすことができるという。つまり、多くの国・地域が地域経済、地域統合に参加することによって、多国間的枠組みをもって日米同盟など東アジアにおける米国の安全保障同盟体制を相対化できるという認識です。これは理論と戦略の融合です。

さらに、東アジア史上の「押し付けられた地域主義」に対する反省から地域主義理論の規範的アプローチを提唱する耿協峰の議論を見

てみましょう。東アジアの歴史上で「押しつけられた地域主義」は三つがあり、一つは古代中国を中心とする儒教システムであり、その次は近代日本帝国を中心とする地域システムであり、さらに三つ目は戦後のアメリカという覇権国を中心とする地域システムです。このような覇権主義の主導による「地域主義」を反省して、今後は真に地域の利益を大事にするような規範的地域主義アプローチが提唱されているわけです。これは歴史あるいは思想から理論への波及であり、発展でしょう。

また、清華大学の有名な学者である汪暉さんの議論も注目に値します。汪暉は「新左派」の旗手と位置付けられることが多いですが、彼自身は批判的知識人というスタンスをとっています。彼の議論には、近代西洋中心的な世界史を書き直すという基本意識が強くみられます。彼にとって、西洋的な近代をいかに相対化するかという課題が重要なのです。汪暉はこれまで西洋中心的な枠組みによってばらばらに批判されてきたアジアの思想やさまざまな思想的資源を解放させ、新しいアジア像をつくるべきだという議論を展開しています。

汪暉はさらに、資本主義とこれまで欧米中心的な規範（地域主義を含む）と異なる社会関係と地域的価値の創出を強調しています。明らかに彼は欧米主導の資本主義のオルタナティブを求めています。それが将来の中国の一つの可能性を示唆しているのだとすれば、中国では新しい社会主義が現れる可能性を否定できないと私は考えます。

もう一つは華夷秩序の議論です。中国では多くの学者が華夷秩序における中国中心主義を批判し、今後の地域秩序を構築する際には「不平等」な華夷秩序を越えないといけないと主張しています。しかし他方、華夷秩序という古代中国を中心とする地域秩序は「平和的」なものであったこと、特に西洋発の、戦争の

絶えないウェストファリア体制＝国民国家体制に比べると、その平和的な性格がいつそう顕著であるというような議論も展開されています。「華夷」理念における自民族中心主義からの脱出を主張する東北師範大学の韓東育さんや、「東アジア文化共同体」の再構築に期待する復旦大学の葛兆光さんは代表的な研究者です。

最後に、この発表から中国研究、日中関係研究へのインプリケーションについて、3点を述べたいと思います。

一つは中国のアイデンティティの再構築における東アジア／アジアの役割、あるいは在り方です。この点については先ほどすでに触れました。

もう一つは日中和解の課題と可能性です。90年代初め頃、「日中同盟」のような議論（日中提携）を説く中国の学者がいました。しかし90年後半になると、日本国内のネオナショナリズムの動き、特に98年訪日した江沢民国家主席が日本側に歴史問題に関する謝罪文言を共同声明に盛り込むよう要求し、日本政府に拒否されたこと、また台湾問題について日本政府が消極的な姿勢を見せたことは、中国における対日不信感を強めていきました。つまり、日本の歴史認識問題が、中国の研究者の日中関係に対する危機感を高めた側面があります。したがって、日本と中国の和解が非常に重要な課題です。ただ、どういうふうに和解のプロセスにつなげるのか、ナショナリズム、リアリズムが幅を利かせる今日においては非常に難しいです。やはり地域協力を推進することによって、日中間の信頼関係を醸成していくようなアプローチが有効だろうと考えます。

そして、3点目は日本との比較研究、つまり多角的アプローチによる日本と東アジア秩序の研究です。これまで中国の東アジア共同体、あるいは東アジア論を見てきましたけど

も、こういった多角的アプローチをもって、現代日本を研究することに意義があると考えています。

駆け足でしたが、以上で発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

*参考文献

〈日本語〉

- [1] 青山瑠妙『中国のアジア外交』東京大学出版会、2013年
- [2] 天兒慧「新国際秩序構想と東アジア共同体論——中国の視点と日本の役割」『国際問題』538号（2005年1月）、27-41頁
- [3] 大庭三枝『重層的な地域としてのアジア——対立と共存の構図』有斐閣、2014年
- [4] 大沼保昭編著『東亜の構想——21世紀東アジアの規範秩序を求めて』筑摩書房、2000年
- [5] 葛兆光（辻康吾監修 永田小絵訳）『中国再考：その領域・民族・文化』岩波書店、2014年
- [6] 川島真「中国における国際政治研究の展開」（『国際政治』175号（2014年3月）、100-114頁
- [7] 金鳳珍「東アジア規範秩序の構築に向けて——朝鮮半島からの視点」大沼保昭編著、前掲書、100-132頁
- [8] 朱建榮『中国外交——苦難と超克の100年』PHP研究所、2012年
- [9] 徐濤『台頭する中国における東アジア共同体論——戦略・理論・思想』花書院、2018年
- [10] 徐濤「中国学派の登場？—現代中国における国際関係理論の『欧米化』と『中国化』—」（『アジア研究』第58巻第1・2号（2012年4月）、51-68頁
- [11] 進藤榮一『アジア力の世紀——どう生き

抜くのか』岩波書店、2013年

- [12] 高原明生「東アジアの多国間主義——日本と中国の地域主義政策」『国際政治』133号（2003年8月）、58-75頁
- [13] 毛里和子「東アジア共同体と中国」『国際問題』551号（2006年5月）、4-14頁
- 〈中国語〉
- [14] 『読書』雑誌（1990～2012）
- [15] 耿協峰『新地区主義与亚太地区結構変動』北京大学出版社、2003年
- [16] 韓東育「東亜の病理」『読書』2005年第9期、101-110頁
- [17] 韓東育「“華夷秩序”的東亜構架与自解体内情」『東北師大学報』2008年第1期、46-55頁
- [18] 何包鋼「亞洲的大国協調与複合地区主義」『国外理論動態』2015年第2期、67-76頁
- [19] 何芳川「“華夷秩序”論」『北京大學學報』190号（1998年第6期）、30-45頁
- [20] 何新『全球戰略問題新觀察』時事出版社、2003年
- [21] 胡鞍鋼 門洪華編『中国：東亜一体化新戰略』浙江人民出版社、2005年
- [22] 蔣慶『政治儒学：当代儒学的轉向、特質与發展』北京：三聯書店、2003年
- [23] 李開盛「地域国際主義与中国的東亜外交」『外交評論』2008年第6期、20-25頁
- [24] 李雲泉『朝貢制度史論——中国古代对外關係体制研究』新華出版社、2004年
- [25] 林尚立「從区域離散到区域優勢：中国的東亜戰略」、肖歆容編、前掲書、174-189頁
- [26] 劉興華「地区認同与東亜地区主義」『現代国際關係』2004年第5期、18-22頁
- [27] 羅榮渠『現代化新論——世界与中国的現代進程』（増訂本）商務印書館、2004年
- [28] 門洪華「地区秩序建構的邏輯」『世界經濟与政治』2014年第7期、4-23頁

- [29] 龐中英「中國的東亞戰略：靈活的多邊主義」『世界經濟與政治』2001年第10期、31-36頁
- [30] 龐中英「地域化、地域性與東亞地區主義」肖歆容編、前揭書、139-155頁
- [31] 秦亞青「關係本位與過程建構——將中國理念植入國際關係理論」『中國社會科學』2009年第3期、69-86頁
- [32] 秦亞青 魏玲「結構、進程與權力的社會化——中國與東亞地區協力」『世界經濟與政治』2007年第3期、7-15頁
- [33] 清華大學國際問題研究所「構建 A3 貨幣聯盟 (Toward A3 Monetary Union)」、2010年6月10日
- [34] 蘇長和「周邊制度與周邊主義——東亞區域治理中的中國途徑」龐中英主編『中國學者看世界 8 全球治理卷』新世界出版社、2007年、339-341頁
- [35] 孫歌『我們為什麼要談東亞——狀況的政治與歷史』北京：三聯書店、2011年
- [36] 孫歌「東亞視角的認識論意義」『開放時代』2009年第5期、5-23頁
- [37] 唐世平 張蘊嶺「中國的地域戰略」『世界政治與經濟』2004年第6期、8-13頁
- [38] 唐小松「三強共治：東亞區域一體化的必然選擇」『現代國際關係』2008年第2期、12-17頁
- [39] 王帆「美國的東亞戰略與對華戰略」『外交評論』2010年第6期、19-28頁
- [40] 汪暉「亞洲想像的譜系」同『現代中國思想的興起』（第二版、下卷）三聯書店、2008年、1531-1608頁
- [41] 汪暉 黃平「重構我們的世界圖景——一代編輯手記」『讀書』2007年第5期、160-167頁
- [42] 汪暉「大陸、海洋與亞洲的區域化」『21世紀經濟報道』2012年3月21日
- [43] 魏玲「規範 制度 共同体——東亞合作的架構與方向」『外交評論』2010年第2期、69-83頁
- [44] 現代國際關係研究院課題組「中國與亞洲——共同復興之路」『現代國際關係』2011年第9期、1-8頁
- [45] 肖歆容編『平和的地理學——中國學者論東亞地區主義』中國傳媒大學、2005年
- [46] 閻學通 孫學峰ほか『中國平和崛起及其戰略』北京大學出版社、2005年
- [47] 葉自成「中國實行大國戰略勢在必行」『世界經濟與政治』2000年第1期、5-10頁
- [48] 俞正樑「積極進取、引領亞洲、全球再平衡——2014年中國外交」『國際觀察』2015年第1期、5-22頁
- [49] 張立文編『和合學與東亞意識——21世紀東亞和合哲學的價值共享』上海華東師範大學出版社、2001年
- [50] 鄭永年『中國崛起 重估亞洲價值觀』東方出版社、2016年
- [51] 朱峰「閩與區域主義與全球主義」肖歆容編、前揭書、52-62頁
- 〈英語〉
- [52] Acharya, A., Buzan, B. eds., *Non-Western International Relations Theory: Perspectives On and Beyond Asia*, London: Routledge, 2010.
- [53] Shambaugh, D., "China Engages Asia: Reshaping the Regional Order", *International Security*, 29 (3), Winter 2004/2005, pp. 64-99.
- [54] Zhang, Y., *East Asian Regionalism and China*, Beijing: World Affairs Press, 2005.